

## 2004年度実施研究会報告

以下の4研究会の活動が終了致しました。

### ■「アフリカ紛争問題への人間中心アプローチ」研究会

〔主査〕望月克哉 〔幹事〕武内進一 〔委員〕平井照水  
(総合研究開発機構), 滝澤美佐子(中部大学), 石原美奈子(南山大学), 篠田英朗(広島大学)

昨年度実施した「アフリカにおける『人間の安全保障』の射程」研究会の第2年度として、同じメンバー構成で実施しました。上半期は、まず5月に中間成果報告に関する合評会、そして7月には今年度の研究方針の検討を行い、下半期は12月に2日間にまたがる執筆方針の報告会、そして年明けの1月と2月にドラフト・ペーパーに基づく最終報告会を開きました。今年度はメンバーがとことん議論することをめざしてきたので、その点では共同研究会のあるべき姿に近づいたと自負しています。これまでがっつきで扱ってきた人間の安全保障概念をアフリカの文脈に引きつけて問い直した成果、そこからメンバーが導き出したさまざまな論点を、報告書として世に問いたいと思いますので、どうか読者のみなさまもご期待ください。

(望月)

### ■『「民主化」とアフリカ諸国」研究会

〔主査〕津田みわ 〔幹事〕佐藤 章 〔委員〕遠藤 貢  
(東京大学), 落合雄彦(龍谷大学)

2年にわたって続けてきた本研究会も2004年12月11、12日の最終報告会をもって終了しました。報告会では、室井義雄さん(専修大学)、高橋基樹さん(神戸大学)、原口武彦さん(新潟国際情報大学)、児玉谷史朗さん(一橋大学)にお越しいただいて貴重なコメントを頂戴しました。アフリカ諸国の1990年代以降の政治変化を規定するものはなにか、そこでの「民主化」と呼ばれる制度変化の役割はなにか——簡単に見えたこの問いでしたが、正面から取り組んでみると、そこには意外なほどの複雑さや陰影が潜んでいることが次第に判明してきた2年間でもありました。このお知らせを執筆している2月現在は、研究会の最終原稿の仕上げに集中しています。成果(『アジア経済』特集号として掲載の予定です)発表の暁には、本欄および研究所ホームページで再度お知らせいたします。(津田)

### ■「転換期のエイズ政策：アフリカ開発への挑戦」研究会

〔主査〕牧野久美子 〔幹事〕吉田栄一 〔委員〕望月克哉, 稲場雅紀(アフリカ日本協議会), 河野健一郎(同), 外処恵美(東京大学大学院)

昨年6月に発足した本研究会は、11月までに計9回の研究会を開催して終了し、現在、報告書の刷り上がりを待つばかりとなっています。報告書の内容については本誌「アジ研刊行図書紹介」欄をご参照ください。2年間をかけ、じっくり腰を落ち着けて研究する通常の研究会と異なり、「短期決戦」型の機動研究事業である本研究会の運営は、とにかく「忙しかった!」というのが実感です。しかし、こうしている間も、アフリカで日々多くの命がエイズで失われていることが、研究会メンバーを突き動かしてきました。研究会では、志澤道子氏(アフリカ日本協議会, 元難民を助ける会ザンビア調整員), 國井修氏(長崎大学熱帯医学研究所, 元外務省経済協力局調査計画課)を講師としてお招きし、貴重なお話を伺いました。(牧野)

### ■「グローバリゼーションと農村社会・経済構造の変容(基礎理論)」研究会

〔主査〕児玉由佳 〔幹事〕清水達也 〔委員〕天川直子, 荒神衣美

本研究会は、2004年4月に1年間の基礎理論研究会として発足しました。本研究会の目的は、先行研究を参照しつつ、農村社会とグローバリゼーションとの関係について考察を深めようというものでした。アフリカに限らず、アジア、ラテンアメリカも対象地域とすることで、より広い視野で農村研究を考える良い機会ともなりました。グローバリゼーションという拡散しがちな概念と多様化がすすむ途上国の農村を、どのように結びつけていくことができるのか、暗中模索、試行錯誤の1年であったともいえます。成果は3月に調査成果報告書(非売品)として発表されます。また、PDF化も計画中で、今春には研究所ホームページにてダウンロードが可能となる予定です。

(児玉)

## 講演会報告

### ■第1回途上国理解市民フォーラムの開催

平野克己「アフリカの米」2004年9月2日, 参加者37名。(於: アジア経済研究所)

## ■アジア経済研究所・PIC東京(世界銀行情報センター)共同講座の開催 (於:世界銀行東京事務所)

- ・平野克己「アフリカのパラドックス——農工間貧困の連関」2004年9月17日, 参加者30名。
- ・望月克哉「『人間の安全保障』概念の射程——ナイジェリアのコミュニティ紛争の事例から」2004年11月17日, 参加者49名。

## 海外通信

■高根 務(在ゾンバ海外調査員): マラウイに来て、まもなく1年になろうとしています。こちらではマラウイ人研究者と一緒に、農村開発に関する共同研究会を組織しています。このほどその1年目の成果がアジア経済研究所ホームページで公開されました。コメントなどいただければ大変ありがたく存じます。(http://www.ide.go.jp/English/Publish/Ars/11.html)

マラウイでは小農による葉タバコ生産に焦点を当てて調査をしています。私が以前調査したガーナのココアと同様、マラウイの葉タバコも100年以上の歴史がある輸出作物ですが、小農を取り巻く経済環境や発展の歴史は大きく異なります。でも農家の方たちの人のよさはいづこも同じで、楽しく調査を続けている今日この頃です。

滞在しているゾンバは山の麓の小さな大学町で、大都市の喧噪とは無縁のんびりした生活を送っています。先日久しぶりに(といっても1年ぶりですが)ガーナに行く機会がありましたが、首都の交通渋滞のひどさと新築オフィスの多さに驚き、すっかり「おのぼりさん」の気分でした。あと1年あまりの滞在の間、のんびりしすぎて頭がぼけないよう気をつけたいと思います。

■福西隆弘(在ロンドン海外派遣員): 昨年の9月よりロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)に在籍しています。ロンドンではアフリカ関連のイベントやニュースが多く、アフリカへの近さを感じます。SOASはそうしたロンドンの中でもアフリカに関する知識が集まっている場所で、社会科学のほか音楽、言語学、歴史などについて豊富な研究者が揃っています。学校では民俗音楽が聞こえてくることもしばしばですが、地域色を感じることは意外と少ないです。最初は建物が殺風景なせいかと思いましたが、どうやらアフリカ系の研究者や学生が少ないためのようです。SOASはロンドン大学のなかではアフリカ系の学生が多いほう

ですが、それでもアメリカの州立大学に比べるとずっと少なく、圧倒的なシェアを占めるアジア系に比べるとほとんど目立ちません。ロンドン大学はアフリカのエリートを育てる場所だと思っていましたが、どうやら違うようです。一方、学校の外には暗くなると麻薬の売人と思われる数人のアフリカ系が常にたむろしています。夏のG7ではイギリスが中心になってアフリカ援助問題が取り上げられますが、その足元のロンドンでのアフリカとの関わり方がまだよく分かりません。

## 訂正のお知らせ

本誌第39号に掲載された織田雪世論文「美容師になることを選んだ女性たち——ガーナ都市部で新展開する女性の職業」につき、筆者より以下のとおり訂正の申し出がありました。

52ページ 15~16行目の「その結果、小中学校の就学率は倍以上に伸びた。」の部分以下のとおり訂正します。「その結果、小中学校における女子就学者数は1.3倍以上に伸びた。」

(『アフリカレポート』編集委員会)

## 「アフリカレポート」ご購入について

アフリカレポートの購読をご希望の方は、アジア経済研究所成果普及課(TEL:043-299-9735, FAX:043-299-9736; E-mail:syuppan@ide.go.jp)までご連絡下さい。

---

## アフリカレポート 第40号

---

### アジア経済研究所

独立行政法人日本貿易振興機構

編集 『アフリカレポート』編集委員会

発行 研究支援部

〒261-8545 千葉市美浜区若葉3-2-2

TEL 043-299-9735 FAX 043-299-9736

---

2005年3月31日発行 定価735円(本体価格700円)

---